

ビビってる？ 鳥影に怯えるツミの営巣地に生息するシジュウカラ

植田 睦之 (バードリサーチ)

殺られるか、生き延びるか…。自然界ではわずかな差がそれを分かちます。生き延びる側にたつためには、捕食者の接近をいち早く察知し、茂みに逃げ込むなど、ただちに反応する必要があります。そのような素早い反応はコストも伴います。過敏に反応しすぎると、危険でないときにも逃げてしまい、採食する時間が少なくなってしまうたり、警戒で消耗してしまったりする可能性があります。危険度の高い場所と低い場所での反応の度合いをかえることで、このコストは小さくすることができると考えられます。そこで、東京都中西部の雑木林でシジュウカラを対象に、捕食者であるツミが生息している林としていない林のあいだで、シジュウカラの警戒反応を比較しました。

シジュウカラの警戒の度合いはキジバトに対する反応をデータ化しました。キジバトは上空をサッと横切るとツミと見間違えそうになるほどツミに似ています。そんなキジバトが林の上を横切った場合にシジュウカラが示す反応を、強い反応、弱い反応、反応なしの3つに分けて、記録しました。強い反応は、ツミが飛んだ時に出す、ツーツーツーという声を出した場合で、弱い反応はそれ以外の警戒声を出したり、さえずりを止めたりした場合です。そしてそれをツミのいる林5か所と、いない林8か所で調べ、比べました。

その結果、ツミのいない林では、上空をキジバトが飛行しても、反応しないことが多かったのに対し、ツミのいる林では反応を示すことがわかりました。実際のツミへの反応はさらに強く、また、キジバトの場合には強い反応を示しても、すぐに警戒を解除するのに、ツミの場合はしばらくツーツーと鳴き続けていることが多く、反応には明らかな違いがありました。シジュウカラはツミとキジバトを識別できるものの、ツミのいる危険な場所では、危なそうな場合にはとりにあらず反応していることが示唆されました。

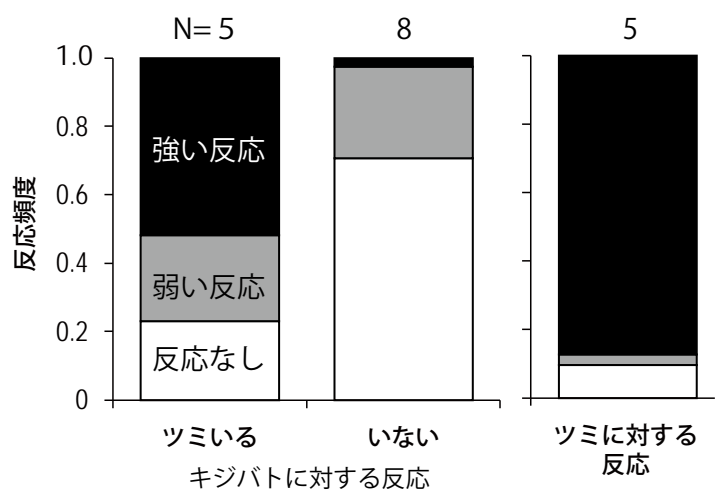


図1. ツミのいる林といない林でのシジュウカラのキジバトに対する反応やツミに対する反応の違い